

村岡典嗣と丸山眞男

荻 部 直

I 村岡典嗣と「東洋政治思想史」講義

東北帝国大学法文学部で「日本思想史」講座（一九二四年発足）の初代教授を務めた、村岡典嗣（一八八四・明治十七年～一九四六・昭和二十一年）については、その思想史家としての業績につき、近年再評価の動きが高まっている。それは新保祐司『日本思想史骨』（構想社、一九九四年）にはじまり、前田勉編『新編日本思想史研究』（平凡社・東洋文庫、二〇〇四年）の編者による解説と参考文献一覧、『季刊日本思想史』七十四号（ぺりかん社、二〇〇九年六月）の特集「村岡典嗣…新資料の紹介と展望」といった文献で、そのおおよそを見ることができさる。

丸山眞男にとっても、村岡の存在感は大きいものだった。それは第一に、東京帝国大学法学部の「東洋政治思想史」講義の前任者としてである。丸山にとって実質的に最後の講義となった一九六七年度講義（この年に講義名を「日本政治思想史」に改めている）の「開講の辞」においては、冒頭で、最初の一九三九（昭和十四）年度の講義を担当

した津田左右吉と、続いて一九四〇（昭和十五）年度から一九四二（昭和十七）年度まで、三回の講義を行なった村岡にふれて、こう語っている。

「津田博士が不幸な思想的圧力によって起訴されたために、次年度から、東北大学で多年日本思想史を専攻された村岡典嗣先生が、国学を中心として、日本の国体思想の歴史を講義された。国体思想史というと、いかにも当時のドグマティックな右翼あるいは国粹イデオロギーにいろどられたもののように思われるが、そうしてまたその当時の大多数のそうした名を冠した書物にしても、本学の文学部で平泉澄教授が行っていた「日本思想史」という講義にしても、まさにそうした性格を濃く帯びていたが、村岡教授の研究態度はきわめて学問的であり、したがってその講義も、もちろん時代の制約はあったが、けっして当時の時流に乗ったり、こびたりしたものではなかった。」（『丸山眞男講義録』第七冊、東京大学出版会、一九九八年、四頁）

丸山は、「ある日の津田博士と私」（一九六三年）で語っているように、助手時代に津田左右吉の一九三九年度講義を聴講していた。それ

は指導教官であった南原繁の指示による。そして同じく南原に言われて、当時の東京帝国大学における日本思想史関連の講義として、文学部における平泉澄の「日本思想史」講義と和辻哲郎の「日本倫理思想史概説」講義にも出席していたのであった。当時は村岡もまた、文学部倫理学科の非常勤講師として一九三五（昭和十）年度から講義を毎年行っていたが、丸山はそちらには出ていなかったようである。

南原繁は、「東洋政治思想史」の講義担当者としては「はじめから津田・村岡の両大関だけ考えていた」と回想している（丸山眞男・福田歆一編『聞き書 南原繁回顧録』東京大学出版会、一九八九年、二四四頁）。「両大関」と言っても、津田を先にして交渉しているので、村岡は第二希望という位置づけだったのだろう。津田の出講が不可能になったあとは村岡に依頼するのが、自然なやりゆきであった。

ちなみに文学部倫理学科の講師としても、和辻哲郎にとって村岡はやはり二番目の候補であった。学科の主任教授であった深作安文に宛てた、一九三五年二月の和辻の書簡二通によれば、村岡を呼ぼうとした深作に対して、当時は第三高等学校と京都帝国大学文学部で講師を務めていた高山岩男の招聘を提案している（『和辻哲郎全集』第二十五巻、岩波書店、一九九二年、五七九～五八一頁）。結局、深作の提案の方が実現することとなり、村岡は東大の停年に達する直前の一九四三（昭和十八）年度まで、講師を務めている。研究は着実だが、地味な大家。五歳下の和辻は村岡のことをそんな具合に眺めていたのかもしれない。

丸山が助手時代に出席した津田の講義の聴講ノートは、資料番号五一一のノートとして丸山眞男文庫に収蔵されている。和辻と平泉の講義についても、資料番号四九三一一の草稿資料として、和辻の講義のノートのあとに平泉の講義のノートを二葉だけ付加する形でひとまとめになっている。平泉の講義の聴講ノートは、活字化された「平泉澄教授「日本思想史」昭和十三年度講義ノート」（『藝林』五一巻一号、二〇〇二年四月）の五月十六日（北畠顕家）、五月二十四日（吉田松陰）にびったり一致するので、一九三八年度、丸山が助手の二年目に出席したと確認できる。

和辻の講義に関する聴講ノートは、緒論の断片、「第一章 記紀に現はれたる倫理思想」、「第二章 国家の倫理的意義」、献身・慈悲の道徳に関する講義の断片、という四つの部分からなっている。この聴講ノートでは、第一章で記紀神話に登場する神々を「祀られる神」と「祀る神」との二つに分類しているが、これは和辻が論文「上代に於ける「神」の意義の特殊性」（『思想』一九三六年六月号）において述べた内容であり、のちに論文「尊皇思想とその伝統」（『岩波講座 倫理学』第一冊、岩波書店、一九四〇年五月、所収）ではこれを四つに分類し直している。したがって一九三九年度以前の講義と考えられ、平泉の講義ノートと一緒にまとめられていることからすると、これも三八年度のものである可能性が高い。いずれにせよ、津田の講義の内容は中国古代の思想であったから、和辻と平泉の講義が、日本思想史に関して丸山が初めて大学で学んだ貴重な機会であった。

Ⅱ 徂徠・宣長論文における村岡の影

丸山眞男の助手論文「近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連」は、一九四〇（昭和十五年）年の二月から五月にかけて、『国家学会雑誌』五十四巻二号から五号まで、全四回で連載されている。丸山の回想によれば、はじめに全体を書き上げたものを分けて載せたのではなく、一号づつ掲載分を書き進めていったのだという（松沢弘陽ほか編『定本 丸山眞男回顧談』上巻、岩波現代文庫、二〇一六年、二二七頁）。助手の三年の任期は、本来この年の三月までのはずであるから、その任期を小刻みに延長しながら雑誌に連載する形で、論文を提出したのだろう。

実はこの論文の構想の全体に、村岡が大きな影響を与えている。もちろん、思想史を分析する方法論としてはカール・マンハイムに多くを負っているし、荻生徂徠の思想に「政治的なもの」の発見を見いだすところは、カール・シュミットの影響が色濃い。だが荻生徂徠による古文辞学の方法が、反対に儒学を批判する本居宣長の国学を生んだという逆説的な展開については、村岡典嗣『本居宣長』（一九一一年初刊。丸山文庫には、一九二八年に岩波書店から出た増訂版が収蔵されている）から学んだことを、のちに『一橋新聞』に掲載されたインタビューで明らかにしている。

「もう一つには、研究開始の当時国学の評価が高く、また羽仁氏

や村岡氏のすぐれた研究があった。本居宣長などは儒教の欺瞞性を容赦なく暴露しているが、私は当時の「教学」に対する反発もあって共感したわけです。村岡氏は、なぜ徳川時代に国学のような考えが出てきたのか研究しています。そこで彼は宣長は徂徠を批判的に受けついだのと言っていた。そこで徂徠に興味をもった。読んでみると大変面白い。」（普遍の意識欠く日本の思想——丸山眞男氏を囲んで）一九六四年、『丸山眞男集』第十六巻、岩波書店、一九九六年、五一頁。以下『丸山眞男集』からの引用は『集』十六巻一九九頁という形に略記する）

助手論文そのものにおいても、この徂徠と宣長との連関を指摘するさいに、注で「徂徠学の国学への影響は夙に先学の指摘するところである。宣長学の解説書として古典的地位を占める、村岡典嗣『本居宣長』（明治四十四年初版）は、この関連を纏まった形で述べた点でも恐らく先駆であろう」（『集』一卷二七四頁）と、村岡の著書を「先駆」としてあげている。だが同じ注ではむしろ、津田左右吉が『文学に現はれたる国民思想の研究』で、徂徠学が国学の形成に「決定的に参与した」と指摘したことを強調する。

これを書いたときはまだ、丸山は村岡と面識をもっていない。この箇所が掲載された『国家学会雑誌』が出たのは一九四〇年五月であり、執筆は四月の上旬から中旬と考えられるから、村岡の「東洋政治思想史」講義を聴く前のことだろう。その前の年に、教室で一緒に右翼からの攻撃に対して防禦の論戦を試みた津田への思いが、ここでの評価

の序列に影響を与えたように思われる。

さらに晩年の回想では、村岡が『本居宣長』第二編第三章で宣長の「物のあはれ」論の奥に、「人生観上の人情主義」、すなわち「め、しくはかなき」感情の流露に「人情の自然」があるとする洞察を発見したこと（『本居宣長』増訂版二八二頁）が、助手論文の大きなヒントになったと説明している。丸山の助手論文は、続いて発表した論文「近世日本政治思想における「自然」と「作為」——制度観の対立としての」（一九四一年～一九四二年）が、徂徠学に徳川思想史の決定的な転換点を見るものであったために、やはり徂徠の意義を強調した論文として読まれることが多い。だが助手論文の題名に示されているように、「徂徠学」と「国学」との双方について新たな側面を描きだそうとする、野心的な試みだったのである。

丸山は、戦後になって助手論文における宣長理解が「主情主義」に偏していると批判されたのに対して、むしろ「主情主義」を強調することに意図があったのだと反論する。

「当時、国学はどういうふうに言われていたかという点、圧倒的に優位なのは国体論的国学なのです。それに対して主情主義を強調すること自体が、時代に対する非常にアンチの意味があるわけです。そういう関係は、当時の国学論を読んでみればわかるのです。……主情主義というのは村岡典嗣さんが使った言葉なのです。……。ぼくが造語したかのように言われて、そういう規定はいかんとやられているんですけど、村岡さんを経由したにすぎない。

ノンボリの面を、むしろ評価したということなのです。」（前掲『定本 丸山眞男回顧談』上巻、二四〇～二四二頁）

たしかに丸山は「主情主義」という語を用いて説明しているが（『集』一卷二八八頁）、『本居宣長』で見るとかぎり村岡による表現は先に挙げた「人情主義」である。だがその記憶違いはともかく、「ノンボリ」の私的な領域において、人々が大らかに感情を表現する自由を説いた思想家としての、宣長の再評価を丸山は図った。その端緒となったのが、やはり村岡の宣長研究だったのである。「当時の国学論」としては、たとえばのちに「超国家主義の論理と心理」（一九四六年）で言及することになる、山田孝雄の著作などを念頭に置いていたのだろう。

『肇国の精神』『国学の本義』（一九三九年）といった著作で山田は、天皇に対して絶対的な忠誠を捧げることこそが、宣長の説いた「やまとごころ」の顕現にほかならないと説いた。そうした言説が流行し、総動員体制を支えてゆく支那事変下の状況に対する批判が、むしろ宣長の思想のなかに潜んでいる。そのことを丸山は、村岡の研究を通じて読みとったのである。

Ⅲ 村岡講義のインパクト

丸山文庫には、村岡典嗣の「東洋政治思想史」の講義の聴講ノートが二種類、収蔵されている（資料番号四九三二一、七四七）。また旧蔵書のなかには、村岡の講義の講義プリント（専門業者が学生によるノ

トを元に作った自主刊行物）が、一九四一年度講義の後半と四二年度の前半の二冊のみ、存在する。

まず、資料番号四九三―二は、「第一章 國體思想の淵源」「第二章 憲法十七条とその思想的意義」の二章から成り、第二章第一節で中断している。これは、資料番号七四七のノートが一九四一年度の講義プリントと重なっていること、また、一九四二年度の講義プリントとは構成が異なっている点から、一九四〇年度の講義の聴講ノートと推定される。

村岡は当時、本務校の東北帝国大学のほかに、東大の文学部と法学部、東京文理科大学でも講義を行ない、同じ講義ノート（準備稿）を部分的にさしかえながら、複数の担当講義で使い回していたようである。一九四〇年度の、おそらく東北大学での講義ノートが「國體思想とその淵源」という題名で、講義ノートを集めた著作集である『日本思想史研究 第五卷 国民性の研究』（創文社、一九六二年）に収められている。

また、東北大学史料館には、「日本政治思想史」と題された、同じ年度の東大法学部用の講義ノートの現物がある。こちらは目次のうち「開講ノ辞」（開講日が四月十八日と記されている）と「序説」しか存在しないが、この二つの章の構成は活字版とほぼ共通しながら、議論の細かな点で違いも見られる（講義ノートの写真複写は、川口雄一氏からご提供を受けた）。

資料番号七四七の方は、開講の辞、「序 國體の語義及觀念 日本の

國體」、古事記の成立に関する解釈、「第三節 神代伝説と皇国主義」の四つの部分からなる聴講ノートである。「村岡典嗣講義草案関係年表稿」（『日本思想史研究 第四卷 日本思想史概説』創文社、一九六一年、所収）によれば、この講義は「國體思想史概説（中世まで）」と記されている。

この講義が丸山に刻印した大きなものの一つは、「日本政治思想史」の研究の方法への問いだったと思われる。一九四〇年度講義の講義ノートにおける「序説 日本思想史トソノ研究法」で村岡は、「文化史」は歴史の一種ではなく「歴史ソノモノテアル」と述べる。つまり、人間の内なる「意識」も、人間が外界に見いだす「事象」も、本来は「文化トシテ一ツ」なのであり、たとえば「政治モモトヨリ文化テアリ」ということになる。歴史の過程で「意識」と「事象」の両者は、分化しつつそれぞれの速度で発展してゆくが、その歴史を「意識」の側について見るのが「思想史」なのである。その「思想」は「無意識下意識ノ状態」から出発して、「意識」されるようになる過程をへて、さまざまな「学問」と「哲学」へと発展してゆくから、各種の学問史・哲学史に対して「思想史」は「前史」の位置にある。そうした、一時代 of さまざまな分野を貫いて広がっている意識のありようを探求するのが、思想史の役割だということになるだろう。

丸山が紹介するように、思想史研究はイデオロギーを排し、徹底して学問的でなくてはいけないという主張も、一九四〇年度講義の「開講ノ辞」に見える。学問的な史料読解の手法を通じて、過去の人々が

考えていた内容を全体的に認識する。そのための道具として村岡が講義の「序説」で紹介したのは、『本居宣長』でも強調した、アウグスト・ベークを代表とするドイツの文献学（フィロロギー）であった。

また資料番号七四七の、一九四一年度の開講の辞の断片においては、思想史研究における哲学の「濫用」を戒めながら、「真理を愛する熱情」を培う「哲学的教養」がやはり重要だと村岡は述べる。そして「真理を愛する熱情」が、「わが国の国学によって最も純粹に実行され、本居によって最も徹底的に自覚され、宣言されたことを回想しうるのは最も愉快なことである」とその一節を締めくくるのである。

おそらくこれを聴き、ノートに記しながら、丸山は何かが違うと思ったのではないか。文献学的方法に対する尊重が、国学に対する評価に連動して、愛国心の主張へとすべりこむ。そうした隘路に陥らずに、日本の過去の思想をまるごと認識する方法を目指さなくてはいい。資料番号七四五の「一九五〇年代後半講義ノート」には、一九五六（昭和三十一年）年度の「東洋政治思想史」講義の開講の辞の草稿と思われるメモが入っている。そこでは「思想史を独立の学問分野として、その方法的自覚を強調してきた学者」として、戦前の村岡典嗣、戦後の家永三郎を挙げている。しかしそのあとで、個別の分野を超えた全体的な「日本精神」の探求が、しばしば国家統合の政治的イデオロギーに利用されたことにふれ、「村岡氏の唯一の科学的警語も「国学」＝日本思想史学という等式において成立した」ときびしい批判を加えるのである。

研究者としての出発点において、村岡の厳密な方法にふれ、しかしそれが同時に「国学」の称揚と結びついていることに感じた違和感。それをみずからの問いとして引き受け、深めることを、丸山はおそらく終生の課題としていたのであった。